

ちいさな手



郡山駅前の線量計は0.147 μSv/時を示している(10月4日) 人権セミナー参加者の集合写真。中央前列は武藤九州教区主教

日本聖公会・人権セミナー2016
『原発問題と人権 in 福島』報告

2005年に始まった^{かんく}管区「人権セミナー」は、2011年を除き「いのち・^{そんげん}尊厳限りないもの」という視点のもと各教区で開催されてきた。今年^{かいさい}は東北教区の当番で、10月4日(火)～6日(木)、^{こおりやま}郡山聖ペテロ聖パウロ教会とセントポール会館を会場として開かれた。参加者は、管区と各教区からの26名と現地スタッフ、合わせて30余名であった。

原発のない世界を求めて



初日は、原発と放射能に関する特別問題プロジェクト事務局長^{いけずみけい}池住圭氏による「原発のない世界を求めて」という講演で、映像と正確なデータによる、現地における最新の話^{じよせん}を聞くことができた。「除染」により^{ひなん}避難区域面積は当初の3分の2に縮小されたが、放射能の心配により、実際には元の家^{もと}に戻らない(戻れない)人が多い。福島県内の震災^{しんさい}関連死2,038人、自死85人は、宮城県、岩手県に比べて、2倍、4倍も多いこと、フレコンバッグ(除染した^{どじょう}土壌を入れた^{ふくろ}黒い袋)の仮置場

980カ所、庭など現場保管86,600ヶ所、置きっぱなしのため中身が露出した^{ろしゅつ}バッグ。増え続ける^{おせんすい}汚染水、^{はいろ}廃炉作業に一日約7,000人が従事。小児^{しょうにこうじょうせん}甲状腺ガンが事故前の日本全体と比べて20～60倍(2015年9月時点)その他、放射能による植物の変化などの話は、原発事故による放射能被害^{ひがい}が、大震災による、地震、津波^{つなみ}の悲惨^{ひさん}さとは、質^{ちが}の違う深刻な問題を現している。

フィールド・トリップ

2日目はフィールド・トリップで、郡山からいわき四倉、夜の森、富岡、浪江、南相馬、飯館など、特に放射能による「居住制限区域」などを越山健蔵司祭のガイドによりバスで回った。放射能測定器、線量計がバスの中でも、0.5マイクロシーベルト毎時や、3.5 それ以上の高い値を示した。0.04が安全、0.23で要除染ということから考えると、ホットスポット(高い線量の場所)の存在も含めて不安は大きい。問題は住んでいる人々も慣れっこになってしまっていることである。常磐線夜ノ森駅近くでバスを降りたが「帰宅困難区域」の看板があった。富岡駅跡でも下車したが津波で壊れた線路が痛々しく、やはり線度も高く復興にはほど遠い。バスから見える森の様子が放射性セシウムのために変化して濃くなったという。その後、浪江町請戸小学校跡を訪ねた。山に逃げて津波から全員が助かったという小学校で、石巻の大川小学校の悲劇とは対照的である。



グループでの分かち合い

大量の黒いフレコンバッグを見て衝撃を受け、また無力感に襲われたという感想と、それにも慣れてしまう怖さ。人が住んでいないのに整備されつつある町、除染が人々の為というより政策の為という空しさ。とんでもないことが起こっているのに忘れ去られようとしている。地震、津波は自然災害だが、原発事故は人間が起こしたもの。自分たち自身のライフスタイルが問われている。人々の心の絆を断ち切る金の力。除染作業員の人たちの健康被害、代替エネルギーの太陽光パネル設置によって地方の自然がそこなわれるという矛盾などなど、参加した誰もが、報告の責任を負いつつ、これをどのように報告したらいいのか、どのようなメッセージを発信できるのかと悩む。

人のいない町＝闇の深さ

小高い丘の上から、津波によって消えてしまった町を想像する悲劇、しかし人が住むことができない、人のいない町の悲劇は原発と放射能の持つ闇の深さを思い知らされる。「原発は一時の夢 永遠の闇」という川柳が見事にそれを言い当てている。南相馬の六角支援隊、大留隆雄氏は、放射能を目に見えないベールにたとえた。「復興」という文字の上に、放射能のベールがかかり、復興を妨げている。もしそのベールがなかったら、復興が見えて、自分たちはいくらでも復興のために力を尽くしたい。悲しいというよりも悔しい。山の幸、海の幸、自然豊かな、幸せな生活が奪われ、家族が離れ離れになり、人の心の絆を切り裂いていく。これから先、何十年、何百年、いやそれ以上先まで、この問題は消えることはない。

見えないものに目を注ぐ

見えない放射能が、ますます見えなくなっていく。忘れ去られていく。復興に取り残された人々が切り捨てられていく。私たちは無力感に襲われているが、私たちにできることは、キリストがそのような小さき人々に寄り添^そっておられたことを深く覚^{おぼ}えたい。そして、「わたしたちは見えるものではなく、見えないものに目を注ぎます」(Ⅱコリント4:18)というみ言葉に立ちたい。(司祭 ^{みはらかずお}三原一男)

くまもとせいさんいち 熊本聖三一ボランティアセンターの現状

熊本県が震度7の地震に見舞われてから半年が過ぎようとしています。そして甚大な被害を受けた熊本を中心に九州で被災された方々の支援のために「熊本聖三一ボランティアセンター」が開所されて5ヶ月が過ぎました。全国から多くの方がボランティアとしてセンターを訪ね、特に6月末から7月中旬までは横浜教区の教役者たちが続々とボランティア活動に参加しました。臨時で発行した『ちいさな手-臨時号-』をお読みになればその時の状況がよく分かると思います。

熊本聖三一ボランティアセンターは9月に入り、一時的にボランティアの受け入れを中止しています。センターとして使われている熊本聖三一教会もやはり地震によって相当な被害を受けており、修復工事に入ることになりましたので、次の体制を整える必要があったためです。幸い、被災地に近いところに空いている住宅を借りることができたので、10月からは新拠点でボランティア募集が再会される予定です。

震災が起こって半年ほどになるこの時点で、やはり世間では九州地震のことが少しずつ忘れられているような気がします。この度、たまたま訪れた熊本聖三一ボランティアセンターでは被災地である熊本ですら、九州地震のことが話題になることが減っているという話を聞きました。しかし、久しぶりに訪ねた被災地である程度片付けられたとはいえ、未だに先が見えない生活を余儀なくされている方がたくさんおられる現状を見て、私たちキリスト者は変わらない関心を持って、被災地に目を向け、耳を傾けなければならないと感じました。(執事 ^{かんひよんじゆん}姜炯俊)



面会支援ボランティア参加のお誘い

社会委員会では東日本入国管理センター(通称:牛久入管)と東京入国管理局(通称:品川入管)に收容されている難民・移住労働者の方で必要な方々に面会支援を行っております。面会支援とは、健康状態や必要なことなどを伺い、難キ連(難民・移住労働者問題キリスト教連絡会)の佐藤直子姉に聞き取った情報を伝える活動です。

難キ連は教派を超えて難民や外国人労働者問題に取り組む、エキュメニカルなキリスト教任意団体で、困難を抱える人々やそのご家族の支援をしております。私たちが行うのは、困難な状況に置かれている方に寄り添い、耳を傾けお話を聞くことです。聞き取った情報から必要な対応は難キ連が行って下さいます。

面会支援をお誘いすると最初は「そんな難しいことはできないわ」と、言われたりしましたが、今では「今回はどうしても行かないの。ごめんなさい」とか、「今度の面会支援はいつですか」とお声をかけて下さり、面会支援が横浜教区の中で着実に広まっていることを嬉しく思います。最近では新幹線で静岡県から参加されたり、牛久の面会支援には17名の方が参加され5グループで面会することができ、東京教区・北関東教区からも参加して下さいました。面会支援は一人ではなく、必ず経験がある人とグループで行いますから、初めてでも大丈夫です。

マタイによる福音書 25:40 に『わたしの兄弟であるこの最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである』と、また同じく 25:36 には「裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれたからだ」と書かれています。あなたの参加をお待ちしています。(近藤順子)

寄付のお願い

收容者への差し入れに以下の寄付を募っています。ご協力をお願いいたします。

- 金券(商品券、ギフト券、図書券、図書カード、クオカード、株主優待券など)
- 未使用テレホンカード ○切手 ○はがき ○便箋 ○封筒 ○ノート ○文房具
- シャンプー ○リンス ○石鹸 ○歯ブラシ ○歯磨き粉

<送り先> 〒110-0005 東京都台東区上野 1-12-6 3F ☎03-5826-4915

『難民・移住労働者問題キリスト教連絡会 宛』

社会委員ニュースレター「ちいさな手」第18号 2016年11月15日発行

編集責任者: 宣教主事 司祭 松田 浩 編集・構成: 原 栄理

社会委員: 司祭 三原 一男、司祭 入江 修、執事 姜 炯俊

近藤 順子(横浜聖アンデレ教会)、原 栄理(横浜山手聖公会)